

# 小笠原にコツブムシの仲間を求めて

布 村 昇



コツブムシの仲間

今年の正月の5日、雪の舞う富山駅をたって、東京の国立科学博物館に出かけました。海の動物の研究のため、小笠原へ調査にいくためです。この研究は国立科学博物館、大阪市立自然博物館それに当館の3館の海産動物担当者と、研究を進めていくもので、私はダンゴムシやコツブムシの仲間（等脚類）の浅海の種類の調査を担当することになりました。第1陣は私とゴカイの専門家の大阪自然史博物館の山西良平さんと、次の便で行く国立科学博物館の武田正倫博士を初めとする本隊と合流します。

翌6日朝に、おがさわら丸は空っ風の吹く竹芝桟橋を出航しました。小笠原は東京から南南東に1000km、飛行機が無いので28時間余りの船旅です。

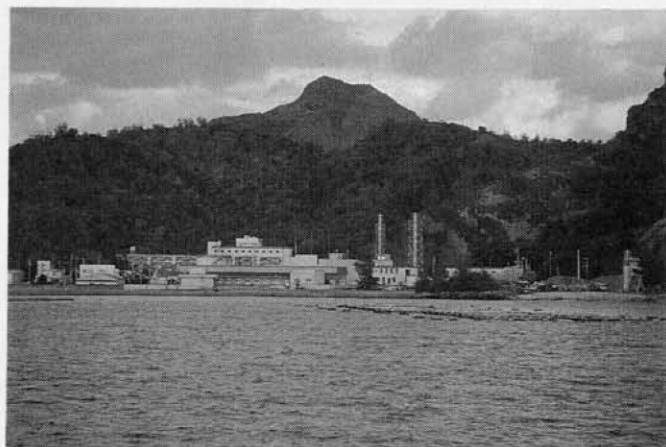
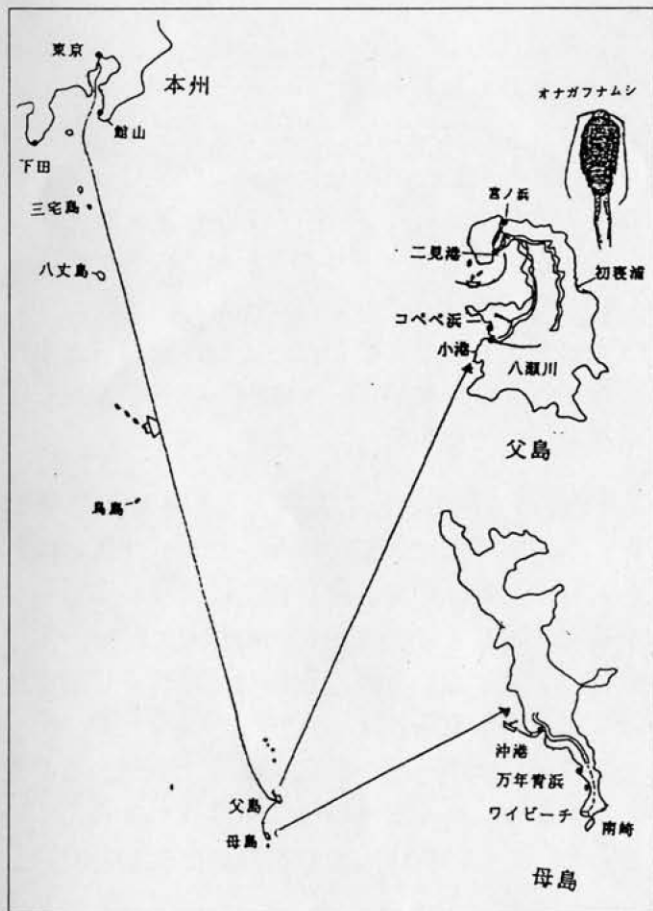
さて、船が東京湾にいる間は、風が強いものの波の強さは大したことがなく、正月を東京などで過ごした人、休暇で小笠原へ行く人たちがデッキ

に出て、やれ「あれが羽田空港だ。あれがレインボーブリッジだ……」などにとぎやかでした。

船が東京湾を出ると風が強くなり、波が高くなり、気分も悪くなってきた人が多くなってきたせいか、デッキにいる人も次第にその数を減らしました。やがて、デッキへの出入りが禁止になり、日も暮れて、夕食時になりました。東京から父島まで4回の食事時間がありますが、船酔いにやられて大変です。食物をとれないままの小学生など、大変なありさまでした。夜が更けて、船が八丈島の近くに來ますと黒潮本流にぶつかり、ますます船の揺れは激しくなり、嘔吐の音が始まりました。ここは波の穏やかな日でも大変だといひます。荷物が左右に激しく揺れ、荷物同志がぶつかるけたたましい音がします。荷物が頭に落ちてこないか心配でした。

船は遅れ、30時間半かかってようやく小笠原の中心にある父島二見港に入りました。特異な山の稜線のシルエットと岩肌が近づいてきました。

船を降りると、島中の民宿や旅館はもちろん、役所や家族の出迎えでごった返していました。さすがに亜熱帯の島らしく、プーゲンビリアやハイビスカス等の花が咲き、ギンネムの林にパパイヤやココヤシ等の木も見え、一月初めというのに気温は21.5度、半袖半ズボンの人も結構多く、富山を出たときの防寒アノラックの姿ではさすがに恥



父島二見港

ずかしい思いでしたが夜になると結構冷え、毛糸のセーターも重宝でした。

8日早朝、母島にむけて出航しました。2時間ほどで母島沖港につき、宿に荷物を置くとすぐ調査を開始しました。この島では、目的地までは歩くしかなく、よろず屋で昼食のパンを買って出かけました。亜熱帯の見知らぬ植物の林やトックリランの畑を越して、葉の広い様々のトベラの林を過ぎると海岸に出ました。沖縄より気温が約2℃高いのですが、第三紀の比較的古い火山島で、沖縄のようなサンゴ礁は発達していません。特産のカサガイが見つかりましたが、この貝は天然記念物で採集禁止なので撮影だけして、再び山道へ出、やがて南端の南崎に着きました。ここは砂浜、



カサガイ

転石、岩盤からなっていて海岸の小動物の生息には理想的な場所でした。砂粒間隙にゴカイを研究している山西氏は、近くのワイビーチで調査をすることにし、分かれて調査をすることにしました。

さて、何度も石の裏側をひっくり返してみても、イシダタミやアマガイの仲間などの巻貝とカニダマシが出てくるだけで目的の等脚類がなかなか見つからないので、焦ってきました。富山あたりだと、ヨコエビ、ヒザラガイ、カニ、ヤドカリ、ゴカイ、エビ、ヒトデ、ウニと言った面々がいっぱい出てきますし、コツブムシなどの等脚類も多く見つかるものですが、ここでは全く見られませんでした。ところがここでやっと石の下にコツブムシ類の数個体を見つけ、ほっとしました。電灯もない山道で迷ったら大変なので時間を決めて調査をしました。



アフリカマイマイ

9日父島への帰る船に乗る直前に波止場で10cmを越すアフリカマイマイの生きた個体を見つけました。この貝はアフリカ原産で食用のためアジアに入り、更に小笠原や沖縄に入ったもので、野菜を食害する害虫として駆除され、多くの殻は見ましたが、生きたものに初めて出会いました。外国の生物をむやみに入れるものではないと思いました。

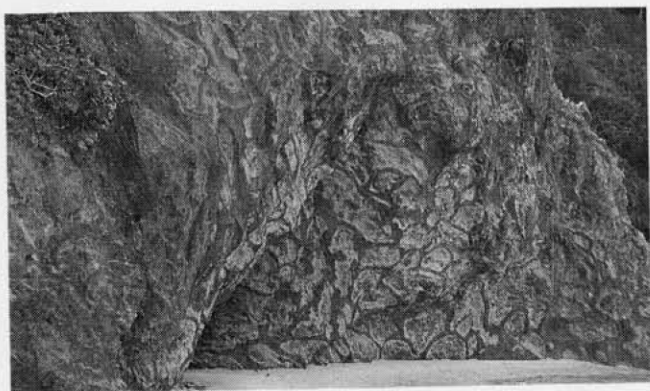
父島へ引き返し、宿に荷物を置くと、この島で最も成果が期待できそうな宮の浜へ行きました。途中には太平洋戦争当時の防空壕が多く、立入り禁止の区域が多く見られました。比較的良い岩礁でしたが、安山岩主体の母島と違って、枕状溶岩主体の父島の転石の磯はいっそう生物が貧弱で、石をひっくり返しても、カニダマシや小型の貝だけが目立ちました。それにナマコが交じっている程度です。しかし、50個程の石を調べたときでしょうか、ニセスナホリムシが顔を出してほっとしました。夜は近くの干潟に採集に出ましたが、成果はあがりませんでした。また、昼採った生物の標本作りの作業やデータ整理、明日の準備など結構多くの仕事が待っています。

10日は父島の東岸の多くの海岸をまわりました。小港海岸では八瀬川のマングローブ風の群落がありました。沖縄と違いここにはマングローブを構成するヒルギ類は見られませんでした。水の中にはアフリカから移入された魚のテラピアと淡水エビが多く見られました。

その河口の小港海岸は広い砂浜ですが、横の岩の岩肌がたいへん面白い亀の甲模様がならんでいました。これは枕状溶岩の露頭が出たものです。



11日は西海岸の初寝浦へ行きました。タクシーで近くの降り口まで行き、そこから1時間ほど急斜面を降りることにしました。モクマオウや



枕状溶岩の露頭

ハスノハグリの木の横の細い道を通り過ぎ、ようやく初寝浦の砂浜にやっとのことで着くと、私たちを見つけたツノメガニたちがさっと逃げていきましたが、逃げ足が早く、捕まりませんでした。

さて、初寝浦はオナガフナムシという種類が初めて採れたところでした。山西さんが採集した標本を研究して新種としたもので、学名をリギア・ヤマニシイという小笠原特産種です。山西氏に献名したものです。ここで生きたオナガフナムシに直面しました。小さな石があるあたりに生息しており、ちょっとした自然の改変があるといなくなると思いました。

ところが、コツブムシなど海産の種類が採れません。何とか水中に入りたいが、波が荒く危険なので思いとどまり、磯の採集にとどめました。午後4時のタクシーの待ち合わせ時間が迫ってきましたので、どうせダメだろうと取った、最後の一つの石の下に、尾が白い見かけない種類のコツブムシを発見しました。帰りの急角度の登りは大変でした。タクシーの待ち合わせ時間に遅れないように必死で歩くのですが、一眼レフや採集品が重たく、膝がガクガクになりました。

12日は昼は砂浜の大村海岸で採集し、第2陣の人たちを待ちました。島に1週間ただけで船が恋しくなり、すっかり島の人気分になっていました。武田博士や貝類の斉藤寛博士と合流し、漁師の方と船での採集の打合せをしました。

13日は、ドレッジ等の許可や打合せなどの事務手続きの後、宮の浜の再調査をしました。

14日、本日は二見湾内のドレッジ調査をしました。漁船に乗り込み、湾奥からドレッジを開始しました。重りを上げると期待が高まります。とにかく重く、四人でやっとでした。採れた泥を水で洗い出し、残った動物を取り出すのですが、湾口付近に行くと波が強く、目の前の景色が海面になったり、空になったりして、立っているのもやっとになりました。その上、雨まで降ってきて、ヤッケの隙間から、背中に水が入ってきます。フラフラの頭で採集物をのぞくと思わず気持ちが悪くなります。でも、カニが出ると武田さんの顔がその都度、思わずほころびます。



ドレッジ調査風景

武田博士らのグループは、これからドレッジ中心のハードなスケジュールが待っており、私たちは明日帰ります。その後、十日間船が無いのです。

15日、様々の思い出の父島を後にしました。帰りの船は行き以上の時化ですごい揺れでした。父島二見湾を出るとすぐにまともに立っていられないくらいでした。船は3時間遅れ、竹芝桟橋に着いたのは翌日の午後8時を過ぎていました。

20度を越す小笠原から、50cmの積雪の富山に帰って久しぶりの寒さに触れ、同じ日本でも広いと感じました。早速調査した標本を見てみると、今まで見たことのない種類が幾つも見られ、苦労が吹っ飛びました。

今後、太平洋はもちろん全世界の文献と見比べ、種名を決定し、小笠原の等脚類の特徴と由来を考え富山の等脚類との比較も行ないたいと考えています。

布村 昇・ぬのむら のぼる(無脊椎動物担当)